

人間の行動の動機づけに関するスピノザの見解

松田 克進

I. 課題の設定

(1) 本小論での「行動」という語の意味

人間の行動が多様であることは言うまでもない。しかし、ある個人が示す行動には、繰り返される行動（反復的行動）と、そうでない行動（非反復的行動）があると思われる。

例えば、A君は毎日フランス語を勉強しているが、スペイン語を学習するのは今日が初めてだ、と仮定しよう。「フランス語学習」はA君の反復的行動であり「スペイン語学習」はA君の非反復的行動である。もちろん、ある行動が反復的か否かを定めるには、あらかじめ、行動が「反復的」と呼ばれるのに十分な頻度の基準を特定化しておく必要がある。しかし本論はそのような特定化を省き、単に常識的な意味でこの語を解することにする。

反復的行動は更に、反射的行動と非反射的行動に分けられるだろう。膝蓋腱反射や発汗作用は前者に、語学学習や観光旅行などは後者に属する。

本論文では、「行動」という語を「反復的かつ非反射的行動」という意味に解する。また、認識等の知的過程をも「行動」の外延に含まれ得るものとする。

(2) 本小論で用いる主要な語および命題

人間の行動の動機づけの問題は、哲学的・心理学的にきわめて興味深いものであると思われる。なぜある人間は会社で働くのだろうか。なぜある人間は数学の研究をするのだろうか。なぜ日本人は玄関で靴を脱ぐのだろうか。

本論はこの問題をめぐるある種の議論を主題としているが、まず必要な道具立てとしていくつかの定義と命題を提出せねばならない。

〈定義1〉「行動xは外発的に動機づけ (extrinsically motivate) られている」とは「行動xは報酬ないし罰という環境からの刺激によって完全に、特定の状況に条件づけられた行動である」ということと同義である。

〈定義2〉「行動xは内発的に動機づけ (intrinsically motivate) られている」または「行動xは内在的 (inherent) な行動である」とは「行動xは外発的に動機づけられていない」ということと同義である。

〈定義3〉「報酬」および「罰」とは、「環境から与えられる快」と「環境から与えられる不快」と同義である。

〈命題A〉人間の行動は全て外発的に動機づけられたものである。

〈命題A'〉人間の行動はすべて、環境から与えられる快ないし不快によって完全に、特定の状況に条件づけられた行動である。(〈定義1〉と〈定義3〉より、〈命題A〉と本質的に同じ命題である)

〈命題B〉人間の行動の中には内発的に動機づけられた行動も存在する。(〈定義2〉より、〈命題A〉の否定命題に相当する)

(3) 本小論の課題

行動の動機づけに関して現代の心理学が提出してきた見解は、しばしば前説の〈命題A〉ないし〈命題A'〉に近いものであったと思われる。例えば、「効果の法則」で有名な心理学者 E. L. Thorndike は〈命題A'〉に近い見解を、アメリカ行動主義心理学は〈命題A〉に近い見解を示していると思われる。

17世紀の古典的哲学の中でも、すでに T. Hobbes は、ほぼ〈命題A〉にあたる考えを抱いていたと思われる。彼によると、人間は心臓を中心とする生命運動のシステムである。外的対象が人間に与える刺激はこの運動を促進ないし阻害する。前者の場合、人間内に、その対象に接近しようとする反作用が生じる。後者の場合、対象を回避しようとする反作用が生じる。人間は経験を積むことにより対象から来る刺激を予期することが出来るようになり、接近・回避の行動のパターンは後天的に一定化する。生命運動を促進ないし阻害するものをそれぞれ報酬・罰と考えれば、この見解は〈命題A〉に近い。

さて、ホッブズから強い影響を受けた B. Spinoza ならば、動機づけの問題にどう解答するであろうか。彼の理論は、主著『エティカ』の前半部分を見るかぎり、ホッ

人間の行動の動機づけに関するスピノザの見解

ブズの理論を心身二側面説の方向に沿って複雑化したものに過ぎず、〈命題A〉ないし〈命題A'〉が主張されているような印象を受ける。しかしスピノザの思想は全体的には、明らかに〈命題B〉を支持していると私は考える。

スピノザの思想の基本的な特徴を整理したのちに、それらを動機づけの問題の文脈の中で解釈し、彼の思想が上の〈命題B〉を支持することを確認する——これが本小論の課題である。

II. 心身論, 認識論, コナトゥス

(1) 心身二側面説

意識現象（以下「M」）と物理現象（以下「C」）との関係を如何に考えるか、という問題は17世紀哲学の中心問題の一つである。

現象 x に関して「 x は M である」が「 x は C である」を含意するか、あるいは (and/or), その逆が成立することを、「M と C は認識上別個ではない」ということにしよう。また、「 x は M である」が「 x は C でない」を含意することを、「M と C は存在上別個である」ということにする。

当時の代表的哲学者 R. Descartes は M と C を、認識上別個なものだと考える。そしてスピノザもそれに歩を合わせた。

では、存在上の別個性についてはどうだろうか。

デカルトは M と C は存在上も別個なものだと主張した。しかしスピノザによると、この主張は、身体の随意運動の際にみられる両現象間の時間的連続関係を奇跡的なものとすることになる。なぜならば「原因と結果は相似たものでなければならない」という因果類似原理 (causal similarity principle) に従う限り、筋肉運動の原因はあくまでも何らかの物理現象であるはずであり、意志作用が如何なる物理現象とも存在上同一でないならば、意志作用と筋肉運動との間の継起関係を説明する積極的な理由がなくなるからである。

この問題を回避するため、スピノザは心身二側面説を主張する。これによれば、

(a) 任意の物理（意識）現象には何らかの意識（物理）現象が対応し、相対応する意識現象と物理現象は同時 (simul) かつ同一 (una eademque res) である。

(b) 物理（心理）現象は他の物理（心理）現象の結果として見られるとき（またその

限りでのみ) 正しく因果的に認識され得る。

スピノザは、身体内の運動と感覚を、同一のものが延長と思考という別個の側面で表現されるさいのその二つの現われとみなす。「延長様態と思考様態とは二つの仕方
で表現された同一物である」^[1]。

(2) スピノザの認識論

二側面説の系として直観的に次のことが帰結する。すなわち、今ある人間に関して
物理(身体)現象 Φ と意識現象 Ψ が同時同一的であり、また同様に Φ' と Ψ' も同時同
一的だとするなら、 Φ から Φ' への物理変化と Ψ から Ψ' への意識変化も同時同一的だ
ということである。例えば身体部位が傷つくことと痛みが生じることとは同時同一的
である。このことからスピノザの認識論は次のような特徴を有することになる。

(a) それは知覚の因果説を取らず、代わりに、直接知 (direct acquaintance) の説を
採る。つまり心は、身体の変化の結果ではなく、その観念(意識)に他ならず、我々
は身体が多くの方で変化するのを直接に感覚するのである。この限り認識には誤謬
はあり得ない。何故なら「人間身体は我々がそれを感じる通りに存在する」^[2]からであ
る。

(b) 外的物体を知覚するときも我々は自分の身体の変化を直接的に意識しているに過
ぎない。

上の(b)によれば、意識の直接的対象は身体であることになる。しかし、意識の志向
の対象が大概の場合に外的物体であることをもちろんスピノザは否定しない。彼が重
視するのは、志向的对象が事実外界に存在するか否かを判断する情報は直接には心
に与えられない、ということである。従って外的物体が存在しなくとも身体の変化すな
わち「痕跡」(vestigium) が持続するかぎり、心はその物体を現在 (sibi praesens)
するものとして意識し続けることになる。

さて、今 A, B という 2 個の外的物体がかつて身体を同時 (simul) にしばしば
(saepe) 刺激したとすると、A の痕跡と B の痕跡との間に連結関係が生じ、その結果、
A, B のうち一方の痕跡が身体の中に現れると直ちに他方の痕跡も自動的に現われるこ
とになる。これをスピノザは「身体変化の連結」(concatenatio affectionum corporis
humani) と呼ぶ。無論二側面説より、これに意識レベルで対応する現象が考えられ
る。つまり「ひとつのものの意識から、それに類似しない他のものの意識へと直ちに

移行する』⁹⁾現象である。これをスピノザは「観念連合」(concatenatio idearum)と呼ぶ。無論その本質は知性の秩序 (ordo intellectus) ではなく習慣 (consuetudo) に他ならない。

(3) コナトゥス説

スピノザは自然界に存する如何なる個体であれ自己の存在を保存するため（しかも究極的にはそのためだけに）様々な行動をなすのだ、と考える。「自己の存在」とはその個体の各部分の「運動と静止の割合」(ratio motus et quietis) のことである。例えば眼前の一輪のカーネーションは、彼の見解に従えば、自己の生体内部のバランスを守るため（かつそのためだけに）細胞分裂やガス交換などの一切の行動を行なう、と言い得るのである。個体のもつこのような自己保存傾向をスピノザは「コナトゥス」(conatus) と名付ける。

スピノザのコナトゥス説を概略的にまとめる。

- (a) あらゆる個体は、その個体特有のコナトゥス（＝自己保存傾向）をもつ。
- (b) 個体の行動はその個体のコナトゥスと環境とによってユニークに決定する。
- (c) (個体を知ることは、差当り、任意の環境下での個体の行動を知ること他にないから) コナトゥスは個体の本質 (essentia) である。

III. 感情, 身体運動, 外発的動機づけ

(1) 3基本感情——欲望・快・不快

スピノザは、上に見た三つの前提に基づいて3基本感情（欲望・快・不快）およびそれらの特殊ケースとしての愛・憎などを合理的に説明できると考えた。

コナトゥス説より人間身体は自己保存傾向を持つ。一方スピノザの認識論は心が身体に関する直接知を持つとする。従って心は身体の自己保存傾向を意識する。この意識が欲望 (cupiditas) である。二側面説に従って言えば、身体の自己保存傾向と欲望とは人間の持つコナトゥスの同時同一的な二つの表現である。

人間身体は外的環境によって様々な変化を被り、そのコナトゥスは促進 (juvare) されもすれば阻害 (coercere) されもする。この促進と阻害に関する意識が快 (laetitia) と不快 (tristitia) である。例えば腕をつねると身体のコナトゥスが阻害されるが、そ

れと同時に一的に不快という意識現象が生起する。このときの身体の物理状態と心の心理現象との間には何の因果関係も存在しない。

コナトゥス説に従えば人間は自己を保存しようと努力する。一方コナトゥスの促進は意識現象としては快として現われる。したがって「心は快を（そしてそのみを）持とうと努力する」と言うことができる。心理的快楽主義の成立である。

われわれの周囲には様々な物質が存在する。例えば食物を摂ることは我々の身体のコナトゥスを促進する。このとき心は食物の意識（＝食物が身体に与える変化の意識であり、かつ食物を志向的対象とする意識）を抱くと同時に快を感じる。食物の意識と快とを同時に抱く経験が繰り返されると前章で見た観念連合が両者の間に生じ、食物の意識が快の原因であるという因果信念が成立する。この時の快は単純な快ではなく食物という外的物体がその原因であるという意識を伴う快である。このような「外的原因の観念を伴う快」(laetitia, concomitante idea causae externae) をスピノザはその物体を（志向的）対象とする「愛」(amor) と呼ぶ。また同様に「外的原因の観念を伴う不快」をその物体を（志向的）対象とする「憎しみ」(odium) と呼ぶ。

ここで注意すべきは愛の対象が決定されるプロセスは習慣にのみ基礎を置くものであるという点である。従って食物を入れる特定の食器のようなものも偶然に(per accidens) 愛の対象となり得るのである。

心理的快楽主義と、愛の対象を快の原因とする因果信念とから、我々は愛の対象を意識（表象認識）しようとする努力が生じることになる。また心理的快楽主義より我々は不快を避けようと努力する。従って憎しみの対象を意識することに我々の心は拒否反応を起こすはずである。

本来のコナトゥスは自己の存在を保持しようとする努力であるが、経験を積み重ねることにより愛や憎しみの対象が決定されると、愛の対象に接近し（愛の対象を意識し）、憎しみの対象を回避する（憎しみの対象を意識しないようにする）努力という具体的なコナトゥスが現われる。スピノザの用語ではないが、前者のコナトゥスを1階のコナトゥス、後者を2階のコナトゥスと呼ぶことにする。1階のコナトゥスが促進・阻害される時我々は快・不快を感じるが、これを「1階の快・不快」と呼ぶ。1階の快・不快の（信念上の）原因を「1階の愛・憎しみの対象」と呼ぶ。すると2階のコナトゥスとは1階の愛・憎しみの対象に接近・回避しようと努力に他ならないと言える。同様に「2階の快・不快、2階の愛・憎しみの対象」を定義することがで

き、一般に「 n 階のコナトゥス・快・不快・愛の対象・憎しみの対象」を定義することが可能となる。このような論理を用いて様々な感情を説明することが可能である。例えば「好意」(favor)は2階の愛の一種であり、「憤慨」(indignatio)は2階の憎しみの一種である。

(2) 感情と身体運動との関係

前説の内容を極めて簡潔にまとめれば、「心は快の原因だと信じるものを意識しようとする」となる。では、心があるものを意識しようとしているときその一方で身体は何をしているのだろうか。スピノザは言う。「快を生むと表象するものを我々は実現しようとする、不快を生むと表象するものを我々は除去しようとする」⁴⁾と。すなわち心がある物体 x (の意識) を快の原因であると信じるとき心は x を意識しようとする一方で、同時に身体は x を眼前に実現するための物理的現象を起こしているわけである。なぜならば二側面説により「心のコナトゥスは身体のコナトゥスと本性上同一かつ同時 (aequalis & simul natura) である」⁵⁾からだ。

我々の日常言語の論理は、日常的レベルで心と身体との交互作用を素朴に認めている。しかしスピノザは、物理現象と意識現象に関する二側面説を貫徹させ、心の動きと身体の動きは同時同一的であると主張するのである。例えば、時間 t_1 に心が歩行への意志を持った後、 t_2 に身体が歩行運動を起こしたとする。この場合スピノザは、 t_1 での意志作用が t_2 での歩行運動の原因だとは見ず、 t_2 での歩行運動の原因はあくまでも t_1 での生理的状态であり、この生理的状态と t_1 での意志作用は同時同一的である、と考えるのである。

(3) 外発的な動機づけ

さて以上我々は、スピノザの基礎的な理論を概観した。それは彼の主著『エティカ』のほぼ前半の内容に相当するものである。

われわれが見た限りでのスピノザの理論は、人間の行動の動機づけに関して如何なる説明を提出するのであろうか。

今仮に、ある人間 P が s という状況で行動 x を行なったと仮定しよう。この事態を、スピノザの理論を基に分析してみることにする。

心身二側面説から我々はまず次の2命題を立てることができる。

〈命題C〉Pの行動xは、xに関するPの意識と同時同一的である。

〈命題D〉Pの行動xの身体的原因と、Pがxを意識しようとする意志作用は同時同一的である。

また、コナトッス説と観念連合の説により、次の2命題を立てることができる。

〈命題E〉心は快を持とうと努力する。(心理的快樂主義)

〈命題F〉心は快の原因だと信じるもの(かつそれだけ)を意識しようとする。

さて、仮定よりPは状況sの下で事実として行動xを行なったのだから、〈命題D〉と〈命題F〉より、Pは、状況sの下で行動xを行なうことが快の原因となると信じていたことになる。すなわち、

〈命題G〉Pは、状況sの下で行動xを行なうことが快の原因となるという信念を持っていた。

さて我々は今、この〈命題G〉を、スピノザが行動に関して一般的に認めている公式としてうけとってよいであろう。問題は、この〈命題G〉を如何に理解するか、である。もし行動xと快に関してPが持っている因果信念が、行動xによってかつて得られた報酬にのみ依存しているのならば、行動xは完全にその報酬によって特定の状況に条件づけられた行動である。しかもxは任意の行動なのだから、人間の行動はすべて外発的に動機づけられたものであると我々は言うことができる。すなわち、本小論第I章に掲げた〈命題A〉が成立する。

しかしスピノザは、〈命題G〉をより広く理解する道を探っている。すなわち彼は、行動xと快との連合は、大概の場合、報酬を介在させる間接的な形で形成されることを認める一方で、行動xの種類によっては、それと快との連合が、報酬を介在させない直接的な形で形成されることを主張するのである。すなわち彼は、内在的な行動の存在を認めているのである。それはどのような行動だろうか。

IV. 内発的動機づけ

(1) 直接的な快の存在

スピノザは『エティカ』第3部定理53で、次のように述べる。

〈命題H〉心は自分自身および自己の活動能力を観想するとき、それだけで(eo

ipso) 快を感じる。しかも、それらを判明に意識すればするほど、その快は大きくなる。

スピノザがこの主張をどのように基礎づけているかは不明瞭であり、ここでは公理的に扱うことにする。しかし、この主張が彼の動機づけ論に決定的な意味を持つ。

この〈命題H〉で言われている「心の自己認識」とは如何なる事態であろうか。これは、心が対象意識（観念）のみならず反省的意識（観念の観念）をも持つことである。すでに見たように、心が抱く意識は基本的に身体に関する直接知であるが、スピノザは、そのような対象意識に関しても心はある種の意識を持ち得ると考えるのである。〈命題H〉がまず含意するのは、反省的意識を持つだけで心は快を感じる、ということである。

次に、〈命題H〉が言及する「心の判明な自己認識」とは何だろうか。それは心が、すでに自分が対象意識として抱いている信念を対象化するのみならず更に批判的に吟味することによって、数学を規範として、外界にかんする体系的で理性的な学問を形成することである。物理学や生理学や政治学など、あらゆる体系的理性認識は「心の判明な自己認識」である。

ただし、物理学などにみられる理性的認識を「心の自己認識」と見なすことは奇妙なことに思えるかもしれない。しかしスピノザにとって科学はあくまでも一種の自己認識である。なぜなら理性的認識は反省的意識から発展するものであり、反省的意識は対象意識のみを対象としているからである。そこで次の命題を置くことができる。

〈命題I〉 理性的認識とは心が自己を判明に認識することである。

〈命題H〉と〈命題I〉より、次の命題が帰結する。

〈命題J〉 心は理性的認識を行うとき、それだけで快を感じる。

この命題および第二章でみた観念連合の説に従えば、我々がもしかつてしばしば理性的認識を経験したならば、我々の心の中に理性的認識と快との連合が成立するはずである。故に、前章の〈命題G〉の行動 x が理性的認識であるならば、我々は行動 x と快との連合を間接的な連合であると考えする必要はなく、それを行動 x とその行動から直接的に得られる快との間の直接的な連合であるとみるのできるのである。

故に外発的に動機づけられていない行動も存在することになる。故に私は、動機づけの問題に関してスピノザは、第I章の〈命題B〉を主張すると判断するのである。

(2) 反論および答弁

ここで私は、「理性的認識は内在的な行動である」という主張に対する可能な反論を3点(①, ②, ③)だけ挙げ、また、簡単な答弁(①', ②', ③')を添えることにする。

- ① 理性的認識は公開的(overt)なものではないから、行動ではない。
- ② もし理性的認識が内在的な行動であるならば、それはむしろ反射であり、それゆえ行動ではない。
- ③ 〈命題J〉はもっともらしくない。
- ①' 公開的でなければ行動ではないという見方は狭すぎると思われる。最近の行動主義心理学でも認知を問題とする学派が存在する。
- ②' 理性的認識が反射でないのは、それをしない人が大勢いることから自明であろう。
- ③' 〈命題J〉をそのままの形で認めることは確かに困難であろう。しかし、例えば数学者が純粋数学の研究に没頭するさい、彼らがその研究そのものからも快を感じることもある、と考えることは極めて自然であろう。

(3) 内発的動機づけと人間の自由

以上私は、動機づけの問題についてのスピノザの見解を整理した。

もちろんスピノザ自身は、この問題を主観的に取り扱っているわけではない。しかし私は、この問題の文脈の中で彼の思想を解釈することが、彼の「自由論」を理解することを、少なくともある程度は容易にするのではないかと考えるのである。最後に少しだけ、このことに言及しておきたい。

自由に関する彼の見解は問題をはらんでいる。というのも、彼は厳格な因果決定論を採る一方で、人間が自由である可能性をも示唆しているからである。例えば彼は、『エティカ』第4部定理67およびそれ以降の諸定理で、「理性的認識に基づいて生きる人間」のことをしばしば「自由な人間」(homo liber)と呼び、また別の箇所⁶⁾では、「人間がより多く理性に基づいて生きる」ことを「人間がより自由である」(magis liber esse)ことと同義であるとしている。しかし彼はなぜ「理性的認識」と「自由」とを結び付けて考えるのだろうか。この問題は、スピノザが次のような定義を暗黙裡に認めていたと考えればある程度解決できるのではないかとすなわち、

〈定義4〉「人間が行動 x に関して自由である」とは「人間が内発的な行動 x を行なう」ということと同義である。

この定義が与える意味で人間が特定の行動に関して自由であることは、決して因果決定論と矛盾するわけではないと思われる。スピノザが人間の自由を問題にしていたとき、彼は人間の行動の動機づけの問題について議論していたのではないか——これが私の、現在の試案である。

引用文献および参考文献

- B. Spinoza, "*Spinoza Opera*" (ed. C. Gebhardt), Carl Winters, 1925. (以下「全集」とよぶ)
- T. Hobbes, "*Leviathan*", Penguin Books, 1986.
- C. D. Broad, "*Five Types of Ethical Theory*", Littlefield, Adams & Co., 1959.
- D. P. Schultz & S. E. Schultz, "*A History of Modern Psychology*", Harcourt Brace Jovanovich, 1987.

註

- (1) 『エティカ』第2部定理7備考, 「全集」vol. 2, p. 90.
- (2) 『エティカ』第2部定理17備考, 「全集」vol. 2, p. 105.
- (3) 『エティカ』第2部定理18備考, 「全集」vol. 2, p. 107.
- (4) 『エティカ』第3部定理18, 「全集」vol. 2, p. 161.
- (5) 『エティカ』第3部定理18証明, 「全集」vol. 2, p. 162.
- (6) 「全集」vol. 3, p. 263, 11. 23-4.

〔博士後期課程〕

Spinoza's View on the Motivation of Human Behavior

Katsunori MATSUDA

A human being can show a very wide variety of behaviors, but this study is interested in a certain group of them : repetitious but non-reflexive behaviors, such as language study or a sightseeing journey.

The author puts the following key definition :

“A behavior x is extrinsically motivated” iff. x is conditioned to a certain situation, exclusively by a reward or punishment from without.

The author then attributes to B. Spinoza the opinion that some human behaviors are not extrinsically motivated.

To make this attribution certain is the purpose of this study.

As an initial step, the author makes clear the most fundamental ideas of which Spinoza's philosophy consists : the double aspect theory, the association of ideas, the 'conatus' doctrine and the doctrine of three basic passions. Those ideas taken into consideration, what do we have to say about the behavior x of a person P ? First, P tried to be conscious of x , and second, P had a belief that x would lead to pleasure. But where did that belief come from? Did it come exclusively from experiences of a reward from without?

Spinoza says that when we are rational we get pleasure from being rational itself. So, the belief that being rational will lead to pleasure need not be said to be formed through stimuli from without, and we can say that being rational is not extrinsically motivated. This is why the author attributes to Spinoza the opinion that some human behaviors are not extrinsically motivated.

Adding a short comment on a possibility of interpreting Spinoza's notion of 'freedom' by that of 'intrinsic motivation', the author concludes the study.